



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第7主日 A年(2023年2月19日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：レビ記 19章1—2、17—18節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 3章16—23節

福音朗読：マタイによる福音書 5章38—48節

隣人と隣人愛

第一朗読の最後の言葉に注目しましょう。「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」ここを直訳すると、「あなたは愛しなさい。あなたの隣人に対して、あなたのように」となるそうです。「自分自身を愛するように」ですと、「自分自身を愛するのと同じ程度に」愛するという意味合いが強くなり、愛の程度の問題としてこの一節を捉えてしまいます。しかし直訳にあるように「あなたのように」ですと、「あなたと同じ立場にある人間として」愛するという意味に変わります。ここでは、程度ではなく、人格あるいは存在として愛することになります。また、ここでの「愛しなさい」は二人称完了男性単数の動詞で、直訳すると「～のように愛するようになる」("You shall love") という意味になります。つまり、やがて神のご計画の中で、あなたは愛するようになるという未来への意味合いが強いです。

イスラエルの民は、「わたしは聖なる者である」(19章2節)といわれる神に倣う者とならなければなりません。そこで『レビ記』19章はモーセの十戒に基づいて、民が聖なる者となるための道を教えています。そこに記されている数々の掟は、「隣人を愛しなさい」(18節)という戒めに最終的に集約されるのです。「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない」(18節)とありますから、ここでの隣人愛とは、復讐や恨みから自分を解き放つ力です。復讐のころを捨てたとき、同胞に罪を犯させないように行動を起こすことができるのでしょうか(17節参照)。

第二朗読はこの数週間、『コリントの信徒への手紙1』が読まれます。コリントの教会は問題含みの共同体でした。分派争いが生じ(1章10-17節、3章3-4節)、しかも自分が知恵ある者であると自負して、キリストの十字架に示された神の知恵に目を向けない人たちがいました(3章18節)。彼らは、パウロによれば「自然の人」(2章14節)、「肉の人」(3章1節)なのです。神の知恵を知るためには霊の働きに頼らなければなりません。霊の働きを受け、真に知恵ある者となるようにとパウロは求めています(2章6-16節)。

21節の「だれも人間を誇ってはなりません」は注目に値する言葉です。分派争いは人間的名声を誇るといふ人間崇拜を生み出します。そして、信仰共同体の中で人間が人間に隷属する関係が生じます。それでパウロは、人間的な名声を誇ることに戒め、「すべては、あなたがたのものです」(21節)と指摘し、すべてはコリントの教会の信者たちに属していると主張します。つまり、一人の指導者との関係を誇り、他の指導者につく者と対立しているのがコリントの教会ですが、実はそれらの指導者(22節:「パウロもアポロもケファも」)も、さらにはすべてのもの(22節:「世界も生も死も、…」)も与えられたものです。与えられているから自由に使えるのではなく、パウロだとかアポロだとかケファだとか、与えられたもののほんの一部を取りだして誇るは無意味だということを伝えたいのでしょう。

福音朗読ですが、律法を廃止するためではなく、完成するために来たと言明するイエスさまは、天の国に入るためには律法学者やファリサイ派にまさる義が必要だといえます(マタ5章17-20節参照)。そして、「しかし、わたしは言うておく」と繰り返しながら旧約の教えを完成する六つの反対の命題を提示します(5章21-48節)。今日の福音の箇所はその中の五つ目と六つ目の命題です。

43節の「隣人を愛し、敵を憎め」に注目しましょう。この一節は第一朗読にあった「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(レビ記19章18節)を思い起こさせます。しかし、「敵を憎め」は、律法にも旧約聖書の中にもないことばです。ユダヤ教で「隣人」とは、同じ神さまへの信仰をもつ同胞のことで、ユダヤ教徒でない人は「寄留する者」(レビ19章34節)でした。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタ5章44節)は、「敵を憎め」を否定するばかりか、限定的で閉鎖的な「隣人」についての理解を乗り越える発言となります。イエスさまにとって愛の対象は、何によっても制限されないのです。ですから、敵には信仰を脅かす人、福音を否定する人、偶像崇拜をする人たちも含まれます。

イエスの教えと『マタイによる福音書』の教えとの歪み

今日の三つの朗読での大きなテーマは、「隣人」とは誰かというものです。「兄弟」は肉親の関係だけを指すのではなく、「仲間」という意味が強いことばです。第一朗読で「隣人」とは「兄弟」であり、「同胞」であり、「民の人々」でした(レビ19章17-18節参照)。その隣人を自分自身のように愛さなければならぬと命じられます。第二朗読では「隣人」ということばは登場しませんが、問題含みの信仰共同体であるコリントの教会の中で、そこに集うすべての人々がキリストに属する者、すなわち「キリストのもの」(1コリ3章23節)なので、信仰共同体のメンバーはすべて「隣人」です。福音朗読の後半では、イエスさまは単なる同じ信仰を抱く仲間としての「隣人」から、敵、迫害する者をも含む「隣人」へと輪を広げていきます。なぜなら、イエスさまが示す天の父は「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(マタ5章45b節)方だからです。

こうした無償の愛を示す父なる神の考えに従ったイエスさまの「隣人」についての考えが、「あなたがたの天の父の子となるためである」(45a節)という一文が加えられたことで、意味が歪められたようにわたしには思えます。『マタイによる福音書』の著者は、「あなたがたの……」を加えることで、イエスさまの教えを倫理的、あるいは道徳的に理解しているのかも知れませんが、イエスさまは何かを獲得するために、「天の父の子となるため」に「隣人を愛」しなさいと命じているわけではありません。